

## 地名・山名・伝承（前篇）

— アヅマはどこか —

## 序 論

第十二代景行天皇の皇子、小碓命（倭建命）が、東国平定の途次、今の東京湾口（浦賀水道）で悪い波に逢い進むことができなかった。海神の怒りを鎮めるため、命の妃（弟橘姫命）が身代りになって入水した。東征の帰路、今の神奈川県、足柄の坂に登り立ち、三歎して「アヅマハヤ」と詔り給うた。そこで東国をアヅマと言う。

以上が、古事記の伝えるアヅマ国名発生の概要である。日本書紀ではまだ帰路ではなく、群馬県と長野県の境「碓日嶺」がこの三歎の場所である。従って方向にも相違が生ずるが、東国をアヅマと言うとする趣旨は同じである。

これらを視野に入れつつアヅマという地名を考えるに当たり、確認しておきたいことは、

- 1、建命（倭建命をこう略記する。以下同じ）が歎いた場所がアヅマなのか？——記では「足柄山」であり、紀は「碓日嶺」であって、共にその所がアヅマと言われているのではない。↓前篇後記
- 2、建命の歎きの対象となった場所がアヅマなのか？ 具体的には浦賀水道（走水の渡）あたりがアヅマなのか？
- 3、1と2を結ぶ方向がアヅマなのか？
- a、記では、足柄から浦賀水道はほぼ東に当る。
- b、紀では、碓氷峠から浦賀は東南である。東南も東のうちで

## 井 上 章

はあろうが、いずれにしても、純粹に方向という抽象的な意味かは、大いに怪しい。↓4

4、以上にかかわる場所全体がアヅマなのか？

a、記では「故、號其国謂阿豆麻也」とあり、其国がどこかは極めて漠然としている。一般には東国全体をさすと解されているが、飛躍を感じざるを得ない。

b、紀ではやや細かく「故因号山東諸国、曰吾孀国也」とあり、結局、今の中部地方との境より東の地域を指すと見られている。常陸風土記に「古者自相模国足柄岳坂以東諸国、摠称吾孀国」とあるのがこの見方に一致する。

このように、アヅマという語によって示す所は精疎の差はあるにせよ、結果的には皆同じく東国全体を言っていると解されている。

しかし、一見精疎の差にすぎないように見えるが、筆者は以下本論に述べるような思考の結果、記・紀の間にむしろ質的な表現差を感じるものであり、それについては、別の機会に論じようと思う。筆者は1、の「三歎の場所がアヅマである」と見たい。↓前篇後記

さて、筆者は、この「東国をアヅマと言う」に別段の疑問を感じてはいなかった。しかし地名に注目するようになってみると、明かに西日本にもアヅマ地名はある。前述の三書によって「アヅマ＝東国」の意は早くからのことだったと見られるのに、西国にアヅマがあるとなると矛盾するのではないかと考えた。

西国のアヅマ地名が割合新しくて、どこか拠点になる所(国府など)のヒガシのつもりでつけた名なら、別段問題にならないが、西国のアヅマのうち一つは、建命よりずっと古い神話に基づく伝承を伴っている。これによるとやはり「アヅマは東国」の意に疑問を感じざるを得ないのである。即ち、広島県・島根県境に「吾妻山」があり、イザナギの命が、火神を産んだために大火傷を負って先立ったイザナミの命の陵がある比婆山(美古登山)を望み「吾が妻……」と懐しんだことによる名だとするのである(角川地名辞典・広島県・「吾妻山」の項。平凡社歴史地名辞典・広島県・「上比婆山」の項による)。

この伝承の出自には多少の疑もあるようだが、これを伝えてきた人たちは「アヅマ＝東国」とは思わずに古来語ってきたであろうから、やはり「西国にある事」とともに「吾妻は東国」を疑わせる根拠にはあげられよう。

さて、アヅマという地名は全国に少からずある。この中で「一町・一川」の名になったものは概して新しいかと思われる。あとは「一山・一マ」が多く、するとアヅマは自然地名であろうと思われる。語尾の「マ」も、ヤマ(山)・ハマ(浜)・シマ(島)・ヌマ(沼)など自然地名の語構成要素(もとは「間」とされる)であろう。湖沼海などにはアヅマ地名はないようであるから、アヅマ川はあっても、水がアヅマと言われるのではない。アヅマを流れるのでアヅマ川と言われるのだ。こう考えると所詮アヅマの本質は山にあると考えられてくる。

ついで、このマを外すと「アヅ」が残る。ここにおいて筆者は、従来行ってきた自然地名解明法にたどりつく。即ち、「アを語頭に置き、タ・ダ行音が後接する語形の地名を体系的に考察すること」である。

## 本 論

筆者は自然地名研究において、ある課題語をとらえた場合、その語のみ限定して研究はしない。その語を含む一つの体系にまどまる(または対応する)と予想される語形を一括して考える方法をとる。

これは、試行錯誤の末に自然に身についた方法であるが、結果的に、いわゆる「音通説」の言うところに近い。もちろんこれは、母韻相互間にせよ、子音間にせよ、どこまで通用可能であるかとか、概して「同意」と言えるにしても、その間に微妙な表現差がないかなど、問題は残っているわけである。筆者が普通と類似の考えで「自然地名の体系」を予想することにも、細かく検討すべき課題がふくまれていることであろうが、それでも、この体系を予想しながら考えることは、むしろ大勢を誤らぬために有用だと信じる。

本研究は、副題にも示す如く「あづま」に焦点がある。そのほか(後篇は)「あづみ」にも狙いがあるが、総じて「アを第一音節とし、第二音節にタ・ダ行音が配される構造の地名の研究」である。結論的な事項を手短かに述べておくと、「台地状の地形」の名であるが、「平面的に広がる場合と線状に連る場合とがあり、広範囲の地形に関連することが多い」と言える。

前述の自然地名の体系性にふれつつ論を進める。「アヅマ・アヅミ」は語尾がマ・ミの対応をもつ。こう述べると、上のアヅは音声・意味ともに同じであることを前提にしていることになるが、「異なる」という証がない以上その考え方で進める。そのような点は、前論文(「天の香具山」考)において課題にした「アマ」も「アミ」と対応してマ

行の体系をもつものであった。同様に既説のタカはタキ…、タガはタギ…と、それぞれ対応している上、タカータガ・タキータギ…と清濁の差でも対応すると考えられた。

ただ、厳密に言えば、予想されたすべての語形が地相と結びついて地名になっている（見出される）とは限らない。しかし、法則性の発見の過程においては、該当例が見出されなくとも、それを含む体系を予想しておく事の意義は決して否定されるべきものではない。自然科学の領域で、あとからそれが発見されて仮説が実証されたケースは二・三にとどまらない。またそれは、筆者自身においては、大字・小字など膨大な数の調査が十分進んではないから「未発見」という場合も多いだろうと思われるのである。

アヅマという地名は、古事記などの語るように「妻を偲ぶ」ことによる名づけであるならば、本来、場所は選ばないものだろう。書紀の文面にもあるとおり、その気持は常時心の中にあるものであり、機にふれ事において意識の表面に出るだけだからである。ただ、とりわけその気持が明瞭にあらわれるのは、故人にゆかりの深い場所・行為などに接したときである。地名の場合、その縁故の場所に来たときとか、よく似た風景に出逢ったなどが、それに当たると言つてよい。ヤマトタケルの命（建命）は足柄山または碓氷峠から浦賀水道を眺め、イザナギの神は吾妻山から比婆山を望んで、「アヅマハヤ」と詔うたというのは事実としてはともかく、話としては自然に受けとられることである。特に建命の話は有名であり、その自然さが、「アヅマ＝東国」の意を固定化させたようで、更には粗末な東国風建築をいうなどとなる

と、軽々しく信ずるわけには行かない。

さて、前述の如く筆者は「ア+タ（ダ）行」全体の体系を考えてい

るので、それに入ってくる地名のリストアップから始める。現行とは異り、歴史的仮名遣で記載する。

#### 1、〔アタ〕

アタ 阿多 鹿児島県日置郡金峰町  
 アタカ安宅 石川県小松市  
 アタギ 〃 和歌山県日置川町  
 〃 阿多岐 岐阜県郡上郡白鳥町  
 アタケ阿岳 岐阜県恵那上矢作町  
 アタゴ阿多古（川）静岡県天龍市  
 〃 愛宕 東京都港区  
 〃 〃 京都市右京区

（全国的に例が多い。代表的な例のみ）

#### 2、

アタノ阿多野郷 岐阜県大野郡  
 〃 〃 静岡県駿東郡小山町  
 アタミ熱海 静岡県熱海市  
 〔アダ〕

アダ 阿田 奈良県五条市  
 アダタラ安達太良 福島県二本松市  
 アダチ安達 福島県安達郡  
 〃 足立 東京都足立区  
 〃 〃 岡山県新見市  
 〃 〃 福岡県北九州市

#### 3、

〔アチ〕  
 アチ 阿知 岡山県倉敷市  
 〃 阿智 長野県下伊那郡  
 アチカハ阿知川 〃  
 アチハラ阿知原 〃

## 4、〔アヂ〕

コアヂ小阿地 秋田市四ツ小屋  
 アヂガサハ鰺ヶ沢 青森県西津軽郡  
 アヂガサキ鰺ヶ崎 山形県鶴岡市  
 アヂマ味鏡 愛知県名古屋市中区  
 〃 味間 奈良県田原本町  
 アヂヨシ味吉 愛知県春日井市  
 アヂマノ味真野 福井県武生市  
 アヂフ 味生 大阪府高槻市三島江  
 〔付アジ〕

## 5、〔アツ〕

アツ 阿津 岡山市  
 アツタ熱田 愛知県名古屋市中熱田区  
 アツダ厚田 群馬県吾妻郡吾妻町  
 アツミ温海 山形県西田川郡  
 〃 渥美 愛知県渥美郡  
 〃 厚見 岐阜県岐阜市  
 〃 熱見 山梨県北巨摩郡高根町

## 6、〔アヅ〕

アヅマ東 群馬県吾妻郡  
 〃 〃 勢多郡  
 アヅマヤマ吾妻山 福島県耶麻郡・福島市  
 〃 〃 広島県比婆郡  
 アヅマダケ東岳 青森県東津軽郡  
 〃 吾妻岳 長崎県南高来郡

## 7、〔アテ〕

アヅマネヤマ東根山 岩手県紫波郡  
 アヅマヤマ吾妻耶山 群馬県利根郡  
 〃 〃 四阿山 長野県小県郡  
 アヅマサカ東阪 大阪府南河内郡  
 アヅミ安曇1、長野県南安曇郡・北安曇郡  
 2、鳥取県米子市  
 3、福岡県福岡市粕屋町  
 安津見 石川県羽咋郡志賀町  
 アヅサ梓 栃木県那須郡  
 アヅサカハ梓川 長野県南安曇郡  
 アヅサヤマ梓山 〃 南佐久郡  
 〔付アズ〕  
 アズマヒ安栖 岩手県雫石町  
 アテ 阿手 石川県石川郡  
 アテマ当間 新潟県十日市町  
 アテマヤマ当間山 〃  
 アテラ（アデラと濁るものも一括する）  
 阿寺 静岡県天龍市  
 〃 〃 愛知県南設楽郡鳳来町  
 アデラ 〃 長野県木曽郡  
 アデラカハ阿寺川 〃  
 アデラヤマ阿寺山 〃  
 〃 〃 新潟県南魚沼郡  
 アテラザハ左沢 山形県西村山郡大江町  
 アテラク当楽 岩手県和賀町  
 アテラクガハ当楽川 〃

## 8、〔アデ〕

アデ 安諦 和歌山県有田郡清水町

アデイノサハ 安庭沢 岩手県下閉伊郡

## 9、〔アト〕

アト 阿戸 和歌山県日高郡由良町

〃 〃 広島県広島市阿佐南区

〃 安登 〃 賀茂郡安浦町

アトツガハ 跡津川 岐阜県吉城郡

## 10、〔アド〕

アド 安曇 滋賀県安曇川町

アドカハ 安曇川 〃 滋賀郡・高島郡

アンド安渡 岩手県下閉伊郡大槌町

アンドヤマ 青森県下北半島

〃 安堵山 奈良県吉野郡

アンドンヤマ 行灯山 奈良県天理市柳本

アンドウ峠 安藤峠 福島県会津若松市

これらを材料に論ずることになるが、全部を網羅することは紙数がゆるさない。よって二篇に分け、代表例で考える。代表の選び方は、1、語形——アナタ（ダ）行の二音節形を基本形としてあげ、更に語構成上特色あるものをあげる。

2、所在——全国的分布に着眼し、なるべく各地の代表を網羅する。

3、地形——眼前に見える形のみでなく、その地形の成立の根源を考えつつ

4、地質——地学上、顕著な事項を含む場合

5、考古——遺跡等と並存する場合

6、古文献・古伝承などにかかわる場合

## 7、著名度——何らかの理由で著名な場合

8、地名の体系上——同じ体系内の地名、またその意味を示す他の地名と関連する場合。

（注）必ずしもこの順に述べるわけではないし、またこれらの条件がすべて満足される例のみ選ぶのではないが、重要度の目やすである。

## 〔アタ 阿多〕

本論文全体の代表地名として、アタを上げる。

1、地学上——鹿児島県はシラス台地の侵食された地形が卓越している事で著名である（前論文カゴに論じた）。阿多は、その薩摩半島の中部西側にあり（鹿児島市の西南約25キロメートル）、金峰山636mの西南麓に続く細長い台地の突端に位置する。この地形は以下に述べる諸地名の大半に一貫する特徴であるが、川による侵食が進んだ所には共通的にあらわれる。

この阿多地方もそうであり、近くに多数の類似地形を指摘できる。そして、次に述べる歴史的着眼点からも、重要であり、しかもこの地方の代表地形名と見られる。

2、神話上——日本神話において、天上世界から降臨されたニニギの尊は、高千穂峰（所在異論あり）から吾田の長屋笠沙の碕に幸し、大山祇神の娘吾田津姫（木花開耶姫）を妃とし、生れた子の火闌降命（火照）が隼人阿田君の祖であるとする。（記・紀同趣）。阿多と笠沙は10km余離れているが実在の地名。

逸文ではあるが、薩摩風土記にも、この姫（關駝ノ郡の竹屋守の娘）により二男子を得たことが記されている。

3、考古学上——この阿多に、阿多貝塚という縄文前期の遺跡がある。即ち、地内を流れる万之瀬川の支流、堀川の左岸で、舌状に突出している洪積台地の末端部である。

この遺跡からは、石器・土器・骨製品など多数が発掘されているとともに、隣接して弥生時代・古墳時代の遺構が発見され、古代において長期間、継続して生活の拠点とされてきた所であることが知られる。アタという地名に関連して注目に価する。

4、古文献の上から——記・紀・風土記のみならず、「唐大和上東征伝」の天平勝宝五年十二月二十日の記事に「第二舟著薩摩国阿多郡秋妻屋浦」とある（群書類従、伝部）。これによると阿多は郡であり、前記「薩摩風土記（逸文）」でも「関駝郡」としているので、これらは「薩摩国」立国以前の状態を示すと見られる（「大隅郡」と対立する薩摩半島全体の称と見られている）。

和名抄には「鷹屋・葛例・田水・阿多」の四郷が記されている（小地域名に変化か？）。

先にも記したとおり、侵食シラスの舌状台地は当地方の代表地形であり、その地名の代表の一つがアタであったと考えられる。侵食・堆積の進行によって地形が（この地名が生じた時より）変化してはいるだろうが、程度問題にすぎないと思う。地学上でもこのアタ地名を広域的に使用している事は「アタ・カルデラ説」にも現れていて、これは薩摩・大隅両半島南部にわたる24 km×14 kmものカルデラがあるとするものである。

## 〔アタ 阿田〕

奈良県五条市東方、吉野川ほとり。高取山584 mから延びる舌状地のわきに当る。

## 〔アダタラ（山） 安達太良（山）〕

福島市西南20 km。一般に「安達」の第一番「太良（太郎）」の意

とされる。長男を太郎と呼ぶ事とこの山名とどちらが早いかわからないが、また語構成上の切り方にも問題があるが、安達と結びつけて考えるのは妥当であろう。

1、山の形——まず安達太良山を概観すると、福島県の中央の北寄り、標高1700 mほど。ところが、独立峰ではなく、北側から列挙すると「鬼面山1482 m、箕輪山1718 m、鉄山1709 m、安達太良山1700 m、和尚山1602 m」と、ほぼ同じ高さの峰が続き、頂上間の直線距離で約6 kmにわたる連峰である。この山の塊について、山麓の同標高を辿ってみても特に一方が長くはなく、連峰らしい様子はとらえられない。しかし、比較的目立つ中腹以上（たとえば1300 m等高線）で見ると、一对二で南北に長い。更に山頂部をつなぐ鞍部は「馬ノ背」の名もあつて細くつながっている事が明瞭となる（前記、山頂の高さ参照）。

2、地学上——この山について、もう一つ顕著なものは、洪積世末期以降、比較的早く形成された「僧悟台・勢至平・五葉松平・仙女平（以上東側）・赤木平（南西側）」などの熔岩台地である。これらは、その間を流れる川（湯川・鳥川・原瀬川——以上東側、杉田川——東南側、銚子沢——南西側）が激しく侵食した結果、舌状の台地を残したもので、その東側は細く延び、末端部が後述の「アダチ安達」である。名の類似、距離の近さでアダタラ—アダチは常識的に結びつけられていたが、地形上、尾根筋で両所は結合している。

3、文献上——既に説かれているが、万葉集で、東北地方を詠んだ歌の中に三首、アダタラ山が出てくる。

### 弓に寄す

○陸奥の安太多良真弓弦着けて

引かばか人の吾を言なさむ（七の一三二九）

○安太多良の嶺に臥す鹿猪のありつつも

吾は到らむ寐処な去りそね（一四の三四二八）

○陸奥の安太多良真弓弾き置きて

反らしめきなば弦着かめかも（一四の三四三七）

三首中二首は「アダタラ真弓」と続けてあり、最初のは「寄弓」の詞書がある。ではどうして弓にこと寄せられるかは、山の形から明らかで、見映えのする東方よりの眺めは、弓の形（弦が地平に）である。ただ若干両端が角張りすぎるが――

アタ系地名語で弓に結びつくのは後述のアヅサにも見られる事で、こちらは梓が弓に好適であるからと言われている。

4、その他――宗教的にも、神・仏・修験など関係するものが多い。古くから人間生活にかかわった所である。

さて、ついでに「別名」にふれておきたい。この山は、岳山（相生集・積達大概録）・二本松岳（松藩搜古・家世実紀）・東岳（新編会津）・沼尻山・硫黄山など言われる中で、会津での呼称とされる「東岳」に注目される。これも一般にはアヅマ＝東の意とされ、事実会津からは東方に違いないが、ヒガシダケでなくてアヅマダケである点からして、筆者はやはりこのアタ系の山名と考える。もちろんそうした場合、すぐ近くにある「吾妻山」と紛らわしくなってしまうが、仮りに同名にされてもよい程、連峰・台形の形に共通性があるのである。

最後に一言付言すると、主峰頂上を乳首にたとえ「ちちくび山」という。しかしこれは部分に限定した名である。その乳をアイヌ語でアタタというとか、金属加工のふいごのタタラだとするような、この山・この頂部のみについて考えるやり方では決して真実にはたどりつけない。筆者は少くともアタ系全部の相關のうに解を見出そうとしているのである。名の語構成は、次項のアダチと互に母韻転換の間柄にあるアダタに、様態性の語尾ラがついたものと思われ、はじめに「安達の太良（郎）」説を紹介はしてあるが、筆者はこれには従えないので

ある。

〔アダチ 安達・足立〕

福島市南西の郊外。地形と地名との関係については、前項アダタラに述べたが、補足して述べると、

1、地形上――福島市南郊外の200m等高線、安達駅西方付近の300m等高線で見ると、川筋において西方の山側に深く切れこみ、尾根筋で東方に長く張り出し、川と川との間（尾根）が細長い台地を形成していることは明瞭である。

2、伝説上――安達ガ原に鬼が住んでいたと伝えられ、謡にもなった。鬼・幽霊などは、境界を画するような所（山・崖・坂・川・橋など）に拠っていた事は明確であり、これも深い侵食の起伏（往時は現今より峻しかつたかも知れないから一そう……）が鬼の好む所になったと言い得よう。

さて、表記が異なる「足立」は、地形的に異なるであろうか？ 東京都足立区の場合はまだ調査が行きわたっていない（昔は今の足立区よりずっと広い範囲を指したとされる）。

福岡県北九州市東部小倉港の南、関門海峡を作っている半島状のつけ根のところ。足立山598mは、その東方4km余の戸上山518mと鞍部をもって連続し、足立山はまた、これに直角に北方へ小舌状地を出している。この場合表記は違っても地形的には安達と全く同じと言つてよい。

岡山県新見市足立。東北方、天銀山981mからの舌状台地末端。ここはアシダチとも言われているが、地形はアタ系と全く一致する。

〔アチ 阿知・阿智〕

長野県下伊那郡。村・川・原にかかわる地名である点で、まずとり

あげる。

a、阿地——長野県飯田市南西12〜13 km地点で、中央アルプスの山並みがほぼ南北に走り、それに平行に天龍川が流れる。中央アルプスの尾根から天龍川までの川の傾斜はきつい。

地理上——当地は、まさに天龍川におちる阿知川とその支流、及び天龍に反対側から合流する米川などが侵食によって作った地形であって、舌状台地で囲まれたのが「阿智村」である。即ち、舌状地上の山頂は高鳥屋山1398 m、夜鳥山1319 m、掛山1162 mなどで、ここに「阿知山」はないが、全体がこのアチで総称されても一向不思議ではない。(アタ参照)。

中央アルプスは直線的で際立って高く長く、東に天龍川、西に木曾川が並んでいるので、山脈の両側に似たような地形が生じている。この阿知川の水源を辿り、分水嶺(中央アルプス)をこえて西に下ると、「吾妻」がある。この名は、実は「蘭・妻龍」の二村が合併した時、「蘭アララギ」「妻龍ツマゴ」を合成した名であるが、地形が後述するアヅマと一致するので、不自然を感じさせない。

それを更に北に辿ると、木曾川沿いとその支流の合流点に「阿寺」がある(後述)。そればかりでなく飛騨山脈より松本市に流下するのが「梓アツサ川」であり、その形成したのが「安曇アヅミ(村)」、更に群馬県との境の「四阿アツマヤ山」(「一」地名は、いずれも後述)あり、これらを加えると長野県はアタ地名のオン・パレードの感深くする。

b、阿知——岡山県にもある。倉敷の古名であるが、その具体的位置は十分明かにされてはいないようだ。ただ、現在の西阿知と対比させて、倉敷の母体をなす地域で、倉敷市生坂が古く東阿智と称した点から、この辺であろうとするのが「地名辞書」である。

一方、倉敷は倉敷川の舟運送によって発展した町で、古くは市のあ

たりから海で、児島半島は島であった。この一帯が浅海であったのを「阿知渦・阿知ノ海」と言ったとされ、この説では低湿地に引きつけられている。

さて筆者の考えでは、津川・六階川にはさまれた所は台地を形成し、北から南へ鶴形山(阿智神社はこの山頂にある)・向山・加須山と並ぶ。これを更に北にさかのぼってみると清音村で舌状台地につながっている(これは軽部山244 mに至る)。これを見ると、やはり舌状台地(特にその末端)がアチであって、渦・浅海もその延長としてアチの名で呼ばれたものと思われる。

c、阿地——なお、岡山市にも「上阿知・下阿地」があり、児島半島には「阿津」があり、いずれも類似地形である。

#### 「アヂ 阿地・鰻・味」

「a コアヂ小阿地」——秋田市四ツ小屋。

地形上——秋田市東方の太平山より張り出す尾根が御所野台地に至り、更に岩見川が雄物川と合流する所まで延びている。この末端部が小阿地で、比高35 m程度の微高地である。

語形上——「小さい」を意味する「コ」が接頭辞として冠したもの。アタ系地名中には他に類例がないようなのでとりあげた。

考古学上——この台地上には「下堤」の住居跡など、縄文遺跡があり、小阿地古墳群もある。早くから人々の居住の場であり、この地名もそういう背景で見るべきものである。

#### 「b 鰻が沢・c 鰻が崎」

b、は青森県西津軽郡の海岸で漁港。「鰻がとれるから」ともいうが、鰻なら日本中どこでもとれる。ここは海岸部から見ると、40 mほどの台地で海岸に平行に崖状の末端が見られるが、台地上に登ると、これが山の方に長く続いているのがわかる。実は秋田県・青森県の境の白



神山地から、ほぼ北に延びる舌状台地なのであって、その長さは35 kmを越す。（注1）

c、山形県鶴岡市に属する海岸で、日本海に岩の尾根が突き出している。これは八森山416 mから張り出した舌状台地の先端で、海岸を通る鉄道・道路ともこの岩の崎をトンネルでくぐる。

〔d アヂヨシ味美、e アヂマ味鉢・f 味間、g アヂマノ味真野〕

d、eともに愛知県春日井市近くにある。ほぼ東北方の岐阜県境、道樹山429 mあたりから延びる舌状台地の突端である共通性あり、名鉄小牧線は台地と川を突切って走り、台地上に味鉢駅・味美駅が並んでいる。同一地相に同系地名の好例である。

f、の味間は奈良県田原本町。笠縫の東。

同じく兵庫県多紀郡丹南町にもあり類似。

g、は前述したアヂマにノ（野）がついた形で、詳しくは考証されていないようであるが、福井県武生市であるとされる。

地形上——福井市の南西部の低地は一带に盆地をなし、武生盆地という。ここは岐阜・滋賀両県との境の山地を流れる日野川の中流域であり、当市付近で支流との間に形成する共通した地形が見られる。即ち、東側は日野山795 m・岩谷山709 m・唐木岳738 mなどから延びる台地、西側は矢良巢岳473 m・鬼ヶ岳533 mから日野川およびその支流の吉野南川ぞいに延びる細長い台地である。特に武生市西南西約5 km、吉野南川の南に「当ヶ峰（アテは後述—後篇）」あり、地名の類似を指摘できる。なお、地形の類似はこれにとどまらず、日野川を5 km下った鯖江市、その東南の今立町など、一帯が細長い舌状台地を含んでいる。

当盆地の地学上の成因は、上古にあった開析山地が曲降したもので、山脚が半島状になり、谷は細長い埋積谷となったものである。

文献上——

万葉集に

安治麻野に宿れる君が帰り来む

時の迎へを何時とか待たむ（巻一五の3770）

和名抄に 味真（高山寺本）、味眞 阿知末（刊本）

伝承上——継体天皇に関する伝承が多いと言われる。同帝の陵は次

条アヂフのある大阪府三島にある。

〔アヂフ 味生〕 大阪府高槻市三島江

1、語構成——動詞性の語尾をとった形に特色がある。この「生」は、植物の後につけて

芝生 シバフ（シボー）

蓬生 ヨモギフ 麻生 アサフ（アソー）

菅生 スガフ（スゴー）

粟生 アハフ（アオー）

などというのは自然な語構成であるが、地名には無生物につけた形がある。

埴生 ハニフ（ハニユー）

園生 ソノフ（ソノー）

船生 フニフ（フニユー）

自然地名シリーズで既説した「天」にも、天生アマフ（アモー）があった。（本紀要第44集）

2、地学上——味生は北摂山地から南に流下する芥川・安威川にはさまれた台地の最低部、淀川に面する所で、これも広義に「台地の先端」と言い得る。（当地の川筋は変動を重ねていると思われるのでやや不明確である）

〔付、アジ〕 本論文はアタタ・ダ行の形の語についてである。上掲の「阿地・鰐・味（この外、遅をあてたものなど）」は皆、歴史的仮

名遣でチであるから問題ないが、一方には「阿字」という地名がある。もちろん字はジだから別語と見なければならぬ（四ッ仮名の区別は中世末・近世初頭までは大体保たれていた）のであるが、「阿字」とする地名でアヂと地形が一致する例がある。

#### 広島県世羅郡協和町阿字

#### 茨城県名珂湊町阿字ヶ浦

これらは音声変化した後に宛漢字が変化したものか、明確ではない（類例は後編所収のアツにも、アズ表記でしかも地相はアツと一致している例がある）。

#### 「アツ 阿津」

岡山市、児島半島の先端で、金甲山403m、東光寺山283mの山塊が細長く続いている。その東端部が細く小さく北に曲って伸び出ている所が「阿津」である。海岸近いから「津」は実質の意も含まれるかも知れないが、中心的にはアタ系のツである。同じ児島半島に「阿知」もある（前述）のであって、地形と地名の類似例である。

#### 「アツタ・アツダ・アツサ―後篇」

#### 「アツチ 安土」

a、山形県西田川郡温海町安土。ここに日本海に流出する五十川があるが、この川と、これに注ぐ小さな沢との合流点を端とする舌状の台地があり、その先端部が安土である。

なお、この安土は、南北に長い八森岳と温海岳（アツミは後述）に挟まれた五十川沿いの小さい集落で目立たないが、今回のアタ系地名の特徴に見事に合致している。ついでに言うとな土集落のある麓は急崖が多く、土壌は極めて崩壊しやすく軟弱である。弓道場の塚・安土が、形・質ともに一致するのにも驚くが、名づけの元は、自然の山の方であろう。

なお、ここは、今記した八森岳が、五十川を挟んで温海岳と向い合う接点である。以上の地形と地名を整理すると、北から

鰐ガ崎・八森岳・安土・五十川・温海となつて、地形と地名の強い相関を見ることができる。

#### b、滋賀県蒲生郡安土町

あまりにも有名な織田信長の安土城のある所である。舟を伏せた形の山で、東方に並ぶ織山も類似形である。今は陸上にあるが、信長の時代は琵琶湖上に島のように張り出していたと言う。縄文・鎌倉期の遺跡がある。

#### c、福井県大島半島のつけ根部、舌状台地の末端である。

#### 「アツマ 東・吾妻」

いよいよ本論文の中心語にたどりついた。アツマ系地名は多いが、まず比較的小さい（焦点があわせ易い）所を先にのべる。

#### 「アツマ 東」

a、群馬県勢多郡東村。渡瀬川に流入する小中川ともう一本に挟まれた舌状台地。侵食の甚しい地形で、麓には「土石流危険地」が多い。足尾山地に続く。実はこの足尾が、川の侵食によって多数の尾根を出しているという意味と思われる。（注2）

b、群馬県吾妻郡東村。沼尾川に沿う尾根を始め数本の小尾根が東北へ北方に出ていて、沼尾川が吾妻川に合流する間に特に顕著な尾根がある。これらの尾根の出どころは榛名山である。約10kmに及ぶ台地状の尾根の末端。

#### 「アツマダケ a 東岳・b 吾妻岳」

「a 東岳」――青森県東津軽郡。青森市東方10km。一般に青森市の東方にあるからこの名があるとされるが、ヒガシダケではない点に注意すれば、アタ系地名の可能性が高い。

東岳は標高684mで、さほど高くはないが、二本の川に挟まれている。山の形は東南側に一つ大きな侵食谷があるが、全体的には極めて整った台形である。南北に長いその辺を青森市方向に見せている。

〔b 吾妻岳〕——長崎県島原半島西側。この半島中で一番大きな、東西に走る活断層に沿って川が流れる。その川の北側に細長く堤防状に、鉢巻山・吾妻岳869m・鳥甲山・舞岳と続く。この連山は南側は急傾斜で下るが、北側は緩く、川に挟まれた台地状の尾根が有明海に向って降る。それが海岸まで降りた所に、吾妻町がある。

〔アヅマネ山 東根山（吾妻根山・吾妻峰山とも書く）〕

岩手県紫波郡紫波町。盛岡市西南17kmほど。頂上928m。それほど高くはないが、途中がドーム状で（角川地名辞典）急峻である。東西二峰がほぼ直角に曲って並び、それぞれ東アヅマネ山・西アヅマネ山という。二峰とも頂部がかなり平らで、同山の案内でも「頂上広場」と言っている。宗教的な信仰の山であつたらしく、麓に石碑が多い。

〔アヅマ山〕

〔1、アヅマヤマ吾妻山〕

本論文の中心課題である福島県・山形県境の吾妻連峰をとりあげる。重要項目なのに後にまわしたのは、筆者が辿った思考過程上の理由がある。実は、この山は単独峰ではない、沢山の山が集合したものである。その特徴をよくつかむ方法が最初浮んでこなかった。しかし、小規模の方を見ているうちに説明の方法が見出された。それを適用するわけであるが、大要は既にアダタラ山の項で行なつた。

地形上——この山塊は、頂上が2000m級であるが、標高1000m程度の等高線を辿っても、数本の谷があろうと気づく程度で、それほど特徴らしいものはない。しかるに、1500m位で描くと、南側に二つ大きな侵食谷（東—大倉川、西—中津川）がクローズアップされ、頂部がヨの字形に配置されている様子がはっきりしてくる。東

端から西端に至るように順序に、山名と頂上標高を示すと、

吾妻小富士1707m、高山1805m、東吾妻山1975m、

一切経山1949m、家形山、中吾妻山1931m、東大嶺1928m、継森1910m、中大嶺1964m、西大嶺1982m、

西吾妻山2035m

高さが非常によく揃った山塊であることがわかるが、頂点に近いて1700mの等高線で見ると、尾根がずっと続いている状が明瞭になり、一般にも吾妻連峰の名で親しまれていることが具体的に把握できる。この等高線の形は串団子（串は曲っている）とも、眼鏡ともたとえられよう。しかも等高線の間隔は中腹が狭く（急傾斜）、頂部が広い（緩傾斜）。これらはすべて、今まで述べてきた例に合致し、総じてアタ系地名として齟齬がないことがわかってくる。

この連峰は、東西に長く、計測のし方にもよるが両端の頂上間は10km余である。

地理上——吾妻連峰は火山で、成立は新第三紀に属し、花崗閃緑岩・第三紀堆積岩類を基とし、噴出物はほとんど安山岩の種類で、一切経山だけは現在でも活動を続けている（噴煙）。

さて、代表的なアヅマ山を述べ終わってふりかえると、アヅマ地名は甲信地方から東北にかけて多く分布している事は明らかで、さればこそ早く記・紀の時代から東国の称として受けとめられてきたのである。これは厳然たる事実と見られる。

では、地名・山名としてのアヅマは、西日本に皆無なのであろうか？ 真実に全く無いならば、本論文は古人の跡をつけたに過ぎないことになる。

しかし、この名は既にリストアップしたとおり、例は少ないながら西日本圏内にもある。ただ、もしそれが単に東国の名を模倣したものにすぎないなら、やはりアヅマは東国だという事に落着こう。よって以

下には西日本のアヅマについて、

1、基点になる所から見て東方である——という見方が不成立、又は不要であること。

2、地形的に東日本のアヅマと一致すること。

3、西日本のアヅマも東日本のと同等に古い地名であること。

これらに注意して調べることになる。

## 〔2、アヅマヤマ吾妻山〕

広島県比婆郡比和町・島根県の境にあり、頂上は1240m。

山の形状——同じ県境で東隣約2kmの所に烏帽子山1225m、南に曲って約2kmの所に比婆山1240m、ついでもう1kmの所に立烏帽子山1279mと、曲折した連峰を形成し、三山ともに頂部の傾斜が緩く広く、吾妻山は特にそうである。角川地名辞典でも、メサ(卓)状地形と説明されている。なお「かつては広い山頂緩斜面であったものが、河川の侵食によって山頂部にのみ緩斜面が残ったものと考えられる」(日本山名辞典・三省堂)と説かれている。

さて、この山の形も前記のように等高線を辿ることによって明確にできる。即ち、標高1000mの等高線は、三つの山の所で円くふくらみ、そして細くつながり串団子(曲った串)ともたとえられる形である。しかもこの曲折点の内側が比和川上流の谷となっている様も付随的な事にすぎないが福島の吾妻山とよく似ている。極端に言えば同一人(神)が二つの吾妻山を作り、かつ名をつけたかと思えるほどである。

地質・成立——玄武岩を基底とする。頂上に近い標高1000m付近に、海成の中新統の地層(備北層)が発見されていて、これは中国山地の形成を示すものとされる。その後海面下に没した事はないから、十分古い所と見られる。

伝承——これは、吾妻山より比婆山の方から述べなければならない。

実は当山塊を総称する名は「比婆山」の方で「比婆山連峰」と言われる。これは「吾妻山連峰」というと福島のと同名になってしまいうからでもあろうが、しかし、そういう消極的な現代的な理由よりも、比婆山のもつ所縁が重きをなしていると思われる。この連山の中で一番高いのでもない比婆山が重視されるべき理由は、イザナミの命の陵墓とされているからである。即ち、古事記によると、火神を産んだがために大火傷を負い、神去りました母神(イザナミの命)について「故、其の神去りましし伊邪那美神は出雲国と伯伎国との境の比婆の山に葬りき」

とある。もちろんこれは神話のことで、事実として証明できるとは考えにくい。

しかし、何らかのモデル様の裏付けなしにこういう伝承が成り立つとも考えにくい。実際、次のような記録には注意すべきである。

比山頂おいは谷とよぶあり、方一町ばかり、平にして柵の古木、茅柴生茂り、中に石あり、下なるも(「の」脱か)長四尺許、濶六尺許、上に烏帽子に似たる石、長三尺余なるあり、いかにも山頂の模様なみなみの山にあらず(『芸藩通志』)。

平凡社、歴史地名辞典「広島県の地名」によった(括弧内筆者)。

この伝承の確実性を判断できる材料は筆者にない。ただ、仮りに根拠はないものとしても、ここがイザナミの命の陵墓と考えられて神域として保存されてきた事は事実であり、真にイザナミの陵墓と思わなければ、「イザナギの命がこのアヅマ山から亡き妻を偲んで『アヅマ(ハヤ)』と詔うた」という伝承もあり得ないのである。

国土・神々の母たるイザナミを偲ぶ、神話中の最古代に属する話が中国地方山地に伝えられ、一方、大和政権の勢力拡大という大事業に伴い、東国でヤマトタケルの命の身代りとなった妃を偲ぶ話が伝えられた。話の重要度は互に遜色ないが、後者は記・紀に載ったために有

名になったかと思われる。↓前篇後記

さて東西のアヅマ山を通してみると、その山が共通の形をもつ点から同一名になっていると考えざるを得ない。自然地名の解明を目的とする筆者として、自然地名の解が、地名の語義なり伝承なりに一致するときは問題ないが、もし喰い違ってきたら筆者としては伝承の意の受けとり方なり隠れた意味なりも同等に再検討を迫られていると考えるのである。↓前篇後記

### 〔アヅマヤマ a 吾妻耶・b 四阿山〕

〔a 吾妻耶山〕——群馬県利根郡水上町～新治村境・標高1323 m。水上町南西4 km。全体が高地にある（800 m以上）が、その麓の等高線から既に南北に長い特徴を表す。さて、1000 m以上になると東西が狭まり、かつ、南東2 kmにある大峰山1255 mと連続した峯であることが明瞭になる。この、連峰という述べて来た形状と共に、この吾妻耶山は頂上が円卓状に隆起しているのが特徴で、全体がアヅマであるとともに頂上がまた一つの小アヅマである。この小さい方は、いわゆるアヅマヤ（東屋）ともたとえられよう。この山名がアヅマヤマであるのは、そのためかと思われるが、根本はアヅマそのものにあると考える。↓b、四阿山（注3）

### 〔b 四阿山（アヅマヤマ吾妻山とも言われる）〕

長野県須坂市と群馬県吾妻郡嬬恋村との境。ここは2000 m級の尾根が新潟県境にまで続き、14山、50 kmにもわたっている。四阿山はその南端部で、この連峰中で一番高い。最も近い峰群のみ北から記すと、万座山1994 m、黒湯山2007 m、御飯山2160 m、土鍋山1999 m、浦倉山2091 m、四阿山2338 m、的岩山1746 m。これら両端の山頂間隔で20 kmに及ぶ。

さて、四阿山の傾斜は、特に東側が急峻で西側はごく緩く、そのままだ北西3 kmの根子山（弥固山）2195 mに続く大鞍部をなしている。

実はこの根子山・四阿山・浦倉山は、2000 m等高線がL字状に続いていることでも察しられるように、それぞれの山は四阿カルデラの外輪山における頂点なのである。火口外輪山頂は概して切り立っていて平地に乏しいのが普通であるのに、四阿山は緩傾斜の円錐形の山で（地学辞典による）、山頂には北に開いた爆発カルデラと思われるものがあり、また頂部は激しく侵食を受けている。四阿山は多くの爆発火口をもつとされ、特に最大の大間隙爆裂火口からの噴出物によって根子山への大鞍部が生じたという説がある（角川地名辞典「長野県」による）。

詳細な地学的知識は古代人の名づけには無縁であろう。しかし、地学的に裏づけられるその事が、容易に見て気づく地形に当てはまっているならば、古代人の名づけの根拠として説明することは決して不当ではない。

四阿山の場合、北の尾根、西の鞍部どちらからでも「アヅマヤ山・アヅマ山」と名づけ得ると思うが、普通アヅマヤ山といい四阿山と書いているのは、北側の、いわゆる「東屋」の形を主にするものかと思う。しかし、筆者はアヅマヤ山というのは二次的な言い方で、本筋はアヅマであると思う↓a 吾妻耶山。しかもbの方はヤをつけずに「アヅマ山（吾妻山）」とも言われるのだから、「アヅマヤ山」アヅマ山」と言って過言ではないだろう。

### （前篇後記）

本論文は本来一つのものを都合上二分割したものである。よって、「結論」はここには置かない。制限の紙数も超えているので、序論に「三歎の場所がアヅマであると見たい」と記しておいた点をふりかえることにする。

本論に述べたとおり、アヅマは尾根筋を言っている。この地形は「足」地名に結びついていることを群馬県勢多郡東村が足尾に続く点で示した。

しからば、逆に、足地名が尾根筋（アヅマに当る）を表した例があるのではないかと考えると、古事記での建命三歟の場所は外ならぬ「足柄」であることに気づく。

足柄は、北は丹沢、南は箱根の両山地が、川の侵食によって多数の尾根筋を形成している。即ち、酒匂川上流部で中津川との間に松田町北部の尾根、皆瀬川との間にも山北町の尾根（先端の地名が「台」）があり、狩川（酒匂川の西側支流）に落ちる小支流によって東向きの尾根群がある（代表は山王川との間の穴部・久野の尾根。この先端が小田急足柄駅のある町部）。更に小田原市南方は真鶴・湯河原に至る東向きの尾根（例、石橋山・柵子下など）があるとおりである。足柄峠を西に越えて静岡県に入っても足柄という地名は使われている（御殿場線「足柄駅」など）。尾根が北にのびた側面である。なお川を挟んだ対岸には西方の富士山から続く尾根が張り出し「阿多野」がある。これのみならず、南に伊豆半島東側に入っても同じ地形が続き、「熱海」に到る。熱海は東が海で北・西・南をコ字形に山が囲んでいるが、これらの山は皆頂部が長い形であり、特に北側の岩戸山は舌状大地が長く海岸付近までのびていて、大変めだつ地形である。海岸部の温泉なので「熱海」と表記するのは自然の着想であろうが、意味的に掛詞になったもので、本来は地形を表わすと見たい。この点、山形県の温海とよく似ている（アツミは後篇）。

以上「足柄」というのも「足尾」に似て、足状の尾根筋を言うかと解される。

既述のように、アヅマ（東）が足尾にあってその代表地形に一致し、足柄が同じ地形で代表されるなら、足柄をアヅマと言ってよい理である。

る。筆者が、古事記の三歟の場がアヅマなのだと考える理由である。建命は「アヅマでアヅマを見ながらアヅマハヤと詠うた」わけである。ここで、もう一度、古事記では弟橘姫を偲ぶという筋から離れて「アヅマハヤ」の話が出ている事を想起すると、これは、建命が次つぎに現れ続く尾根筋を見て感歎した。あるいは、その踏破の難渋をふりかえって「ああ、きつかった（秋田詞コワエガッタ）」の意味で「アヅマ・アヅマ！ あーあ」と言った体言提示の感動表現をしたと解した方が自然だと思えるのである。

連鎖的に思考を進める。古事記の三歟の場所が尾根筋でアヅマであるとわかった。では、場所は違っても同じ内容の伝承があったとすれば、何らかの共通性があるべきなのである。筆者ははじめ小碓命の縁で碓日嶺に結びつけられたのではないかと考えてみたが、やはり自然地名の考え方で行きたいと思っていた。

さて、本論の各所に出てきた（また後篇にも出る）とおり、群馬県・長野県は「アタ系地名」が多い。そこで想起したのが、先年アキ地名調査のため群馬県伊勢崎市より西に入り、安中・秋間川などを訪れたときに見た、東方に向って流れる川の中に尾根筋が続いている地形である。その東流する川の一つが碓氷川なのであり、名のとおり碓氷峠の近くから流れている。この碓氷川とその支流との間に舌状台地・尾根が形成されている。中仙道や信越線松井田駅・西松井田駅の北側のそれ、更に峠を越えてからも上平尾など、大小の舌状台地が次々に見られるのである。松井田の尾根は北の鼻曲山1654mを経て浅間山2542mの方まで続く勢を見せている。本論文では序論に「三歟の地がアヅマといわれているのではない」と確認して出発したのであったが、古事記の「足柄」が逆にアヅマ地形に該当することがわかり、ついで書紀の「碓日」も同じくアヅマ地形だとわかった。（注4）

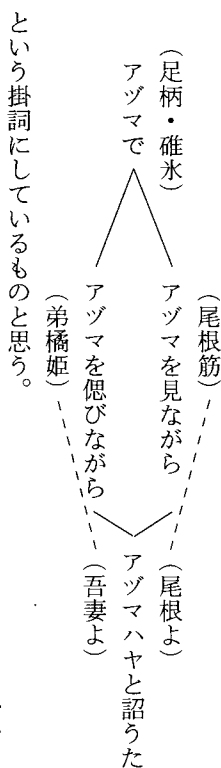
かくして、三歎の場を古事記・日本書紀が違えて記しているのは、「アヅマ」として指した場所を「一か所のみに限定できない。両所とも甲乙つけ難い。地形的にどちらもアヅマだ」ということのあらわれであり、あらためて古代人の地形を見る目の確かさ―広域的な見方―に驚かされる。然り、広域的に見れば西日本にもアヅマがあり得る。アヅマは固有名詞ではなく、特定の地形を表した普通名詞なのであり、日本語の行われる所ならどこにあつてもよいのである。

今、筆者が「古代人の地形を見る目」と言つた古代人とは、記紀の時代よりたぶんずっと古い、アヅマという地名を作つた当時の人のことである。その時代の「地形を見る目は確かだ」と言いたいのである。実は記紀の時代、近畿圏に中央政府があり、全国を地域分けし（素朴な分け方は更に古いにせよ）、アヅマという地名（地域名）の由来を説明しようと思つたときは、もう古代人の自然地名を見る確かな目は曇りはじめていた。風土記もその点では類似であり、既に「地名由来伝説」は根拠の浅いものが多いことが知られている。

「アヅマは東国」との観念を作つてしまつたから、西国（広島・島根）にあるアヅマ（吾妻山）についての伝説―建命の伝説に引けをとらないイザナギ・イザナミ両神の話―は意図的に記紀等にとりあげられなかったのではあるまいか。

最後に付言すると、前述の如く「建命が詔うたことばそのものは尾根筋の地形―それを踏破する労の歎息」で、自然地名をあげて「アヅマハヤ」と詔うたのだとしても、第三者はどう受けとるであらうか？ さし当り建命に随行した人たちは、必ずや弟橘姫を偲んで「アヅマハヤ」と詔うたのだと解しただろう。

結果的にこの文は、倭建命のことばを



この古事記における倭建命三歎の場面の解釈については、書紀の当該箇所（書紀・日本書紀）の補注に「中つ目（鹿が現れ、蒜を投げつけたら目に当って鹿は死んだ）」の意とする説が示されているが、この「中つ目」の語自体が、地名起源説話に類するものに過ぎないようである。しかし、「吾妻」から離れて解釈しようとする着想は然るべしと思う（関連事項後篇に再説）。

（平成五年七月三十一日 前篇了）

注1・注4

『日本列島大地図館（小学館）』に示された異別コンピューター・マップによるイラストによって、尾根などの地形がよくわかる例である。